

歴史の中のニュー・クリティシズム —コールリッジの批評原理から考える—

The New Criticism in Its Historical Context
—Reconsidering Coleridge's Literary Theory—

石倉 和佳
人間環境部門

Waka ISHIKURA
School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan
ishikura@shse.u-hyogo.ac.jp

Abstract:

This paper explores the New Criticism in its historical context, by examining discourses that questioned its credibility, and by reviewing S. T. Coleridge's literary criticism that has been considered as a theoretical basis for its establishment. By the end of the first half of the 20th century, the New Criticism became dominant in English studies providing practical methods that examine literary texts minutely with the rise of new literary curriculum in newly founded colleges or universities. Although its influence on the pedagogy of English studies is still visible, its decline in importance as a critical movement seems to be obvious. However, it is worthwhile to reconsider such an influential literary movement as vital to unveil the mechanism that had spurred the institutionalization of English studies, which is exemplified in the process of spreading the methodology of this type of literary criticism. Examining Coleridge's critical and philosophical concepts that are given in his *Biographia Literaria* and his Shakespearean lectures as well, helps us understand how the historicity of critical concepts really is, and how critics of the New Criticism absorbed Coleridgean literary concepts into their own, taking historical and social backgrounds off from their literary execution.

1. ニュー・クリティシズム再考

20世紀の前半に成立したニュー・クリティシズム (New Criticism) による文学作品の分析手法は、その後の英文学研究に大きな影響を与えた。文学作品を客体としての自律的な構築物とみなし批評対象としての価値を明示したニュー・クリティシズムの登場は、20世紀の英文学における文学研究の確立を決定づけるものでもあった。テキスト読解を中心とした研究態度は、R.ヤコブソン (Roman O.

Jacobson, 1896-1982) 等によるロシア・フォルマリズムに代表されるフォルマリズム批評の流れの一つと見ることができるが、英米圏での高等教育進学者の増大を背景として¹、ニュー・クリティシズムは1940年代頃には批評運動として一時代を画すことになった。

ニュー・クリティシズムという用語を定着させたのは、代表的な批評家の一人、ジョン・クロウ・ランサム (John Crowe Ransom, 1888-1974)の著書、

『ニュー・クリティシズム』(*The New Criticism*, 1941)である。ニュー・クリティシズムの主流は詩の批評であり、それはクレアンス・ブルックス (Cleanth Brooks, 1906-1994) の *Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry* (1947) や、ブルックスとロバート・ペン・ウォーレン (Robert Penn Warren, 1905-1989) の *Understanding Poetry* (1938) が示すとおりである。ランサムやペン・ウォーレンが詩人でもあったように、ニュー・クリティシズムの批評家には詩人が多く、アレン・テイト (Allen Tate, 1899-1979) やウィリアム・エンプソン (William Empson, 1906-1984) もそうした詩人かつ批評家の一人であった。これらの主要な批評家の活動の源流となったのは、モダニスト詩人、T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) の文芸批評や、I. A. リチャーズ (I. A. Richards, 1893-1979) の批評理論書 (*The Principles of Literary Criticism*, 1924; *Practical Criticism*, 1929 など) である。ニュー・クリティシズムは一つのマニフェストの下で展開した運動ではなく、先導者一人を特定することもできないものであるが、1920年代から40年代にかけて、これらの人々の著作や発言が相互に影響しながら、一つの批評運動として浸透したものである。後述するように英文学研究が高等教育機関のカリキュラムとして展開することにもなって、文学研究や教授の現場に現在に至るまで強い影響を与えることとなった。

1960年代を境に、ニュー・クリティシズムはデイコンストラクション (Deconstruction) などのフォルマリズム的展開をみせるとともに、続くマルクス主義批評やフェミニズム批評などにより、文学テキストの時代背景やその生成過程、もしくは受容過程など読み手の視点によって相対化され批判されることになる。20世紀終盤から歴史主義的な批評分析が優勢になる傾向と反比例して、ニュー・クリティシズムは批評の主流からはすっかり後退した印象となった。昨今ではニュー・クリティシズムは過去の理論として清算されようとしているかのようであるが、批評の手法として提唱されたクローズ・リーディング (close reading) など、ニュー・クリティシズムの伝統はすっかり消え去ったわけではない。クローズ・リーディングは、テキストに厳密に文字の細かい単位での精読を行い、作品の言語の関係性を読み解くことで、含意や象徴の意味などを掘り起こそうとする読解手法である²。基本的にテキストを第一義とする姿勢は、現在の英文学研

究に一般的に受け入れられているものといえるだろう。言葉と言葉が立体的に相互関連する作品構造を明らかにし、意味の多重性を照射しようとする読解態度は、ニュー・クリティシズムという枠を超えて、現代の文学研究にも生き続けている。

ニュー・クリティシズムでは、作品の背後にある社会や歴史的な文脈、作者の人生や意図を考慮せず、作品そのものにすべての意味の源泉があると考え、そうした批評態度を生み出した何らかの社会的、歴史的な背景があることは事実である。20世紀の初頭から、大学教育が一般に普及していくに従って、教養教育や人文科学のカリキュラムの中に、近代から現代の文学研究を取り入れる方向が強まった。文学を教育ツールに取り入れることで、高等教育機関は増大する入学者へのカリキュラムを賄うことができたのである³。ニュー・クリティシズムは、文学作品を精緻に分析する手法を通して、作品の価値を確立したが、それは批評家たちの仕事に加えて教育の現場でのニーズによっても支えられていた。史料を駆使し膨大な歴史書を参照する必要はそこにはなかった。作家の伝記的事実も創作についての意図も考慮する必要はなかった。教師はニュー・クリティシズムの批評家たちの分析手法を習得し、作品だけを学生の前に差し出せばよかった。つまり、経済的で効率のよい教育システムがニュー・クリティシズムとともに生み出されることになったのである。

ニュー・クリティシズムの提示する精密な読解の行きつく先に、いかなる文学の意義が見出せるかという点について考えると、高度なリテラシー教育といった枠組みは見出し得たとしても、その思想的方向性は曖昧にしか映らないのも確かであろう。19世紀までの古典作品の研究を中心とした人文学の領域では、近現代の文学作品が「批評」の対象になるという考えは新しいものであった。20世紀になって登場したニュー・クリティシズムが掲げる、作品の中にすべてを読む読解の新しさは、高等教育がごく限られた人々にしか開かれていなかった当時のアカデミズムの中では人文学の民主化、平等化といった一つの思想となりえただろう。しかしニュー・クリティシズムが教育手法として広く普及し、批評理論としての輪郭をなくしたあととなつては、何らかの知識、思想の総体だとはもはや考えにくいのである。乱暴に言ってしまうと、ニュー・クリティシズムは英文学研究の中にその手法の痕跡だけ

残してあとは解消されたとも見える。

しかし、そのようにニュー・クリティシズムをすでに消えつつあるものとして捉えた場合、現在の研究の現場に深く浸透している研究手法がそもそものような背景をもって生れ出てきたのかについての、無関心な態度を許容することになるだろう。英文学研究が高等教育機関のカリキュラムとして定着する際に大きな力をもった批評動向を歴史的に再考することは、英文学研究の制度化とそのプロセスを所与のものとして、現在の英文学研究の手法の形成と普及の歴史を批判的に考察の対象とすることにつながるはずである。ニュー・クリティシズムは突然現れた独創的な批評というわけではなかった。それはアメリカとイギリスでそれぞれ違った発展の仕方をした。ランサム、テイト、ペン・ウォーレンらが、アメリカ南部出身であり、バンダービルト大学 (Vanderbilt University) に集った学生たちであったことは、すでにニュー・クリティシズムの重要な歴史として研究されている⁴。彼らが理想としたものが南部の農本主義的共同体であったと考えられることは、この批評の背景に自己充足的で保守的、もしくは反進歩的な思想を読み取ることに繋がるだろう。しかし、そうした共同体の理想が具体的な批評の手法とどのように結びつくか、という点については、大学教育の現場でのこの批評の展開を考慮する必要があるであろうし、そうであれば、高等教育制度の発展とともに考察すべき事項となるだろう。

イギリスの場合は自国の文学伝統への考察とともにニュー・クリティシズムが登場した印象がある。I. A. リチャーズはケンブリッジ大学に新しく出来た英文学科 (English School) に赴任したが、そこで推進されたのは哲学的な文学へのアプローチとともに実践批評 ('practical criticism') を行うことであった。「実践批評」の手法はクロース・リーディングの実例として、その後ニュー・クリティシズムのバックボーンとなっていく。リチャーズの理論の源泉が、ロマン主義時代の批評家である S. T. コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の文芸理論にあった事は、'practical criticism' がコールリッジの用語であったことから明らかである⁵。コールリッジの唱える有機的統一 (organic unity) としての文芸作品、知性と感情を統一させる詩人の力としての想像力 (imagination) といった概念は、批評理論の堅牢な土台を提供した。

とはいえニュー・クリティシズムの批評家たちが、ロマン主義批評を無批判に受け入れたわけではない。ロマン主義の芸術作品に見られる、過剰で不安定な情念や、自己と他者の境界を不分明にしてしまう肥大する自意識などは、コールリッジの想像力論によっても説明しうるものであり、またそうした情念の対象は無限で崇高な要素として捉えられる傾向があった。しかし、ニュー・クリティシズムの批評においては、無限で崇高なもの—すなわち言語が指示する意味を超えた要素—があったとしても、あくまでも作品内部の自律的世界において読解を試みるべきであるとされたのである。ウィムサット (William K. Wimsatt, 1907-75) とビアズリー (Monroe C. Beardsley, 1915-85) による「意図による誤謬」 ("The Intentional Fallacy," 1946) や「感情の誤謬」 ("The Affective Fallacy," 1949) などの議論を見ても分かるように、作者の意図も読者の印象も読解のプロセスからそぎ落としていく理論化の過程により、ニュー・クリティシズムは理論としての骨格を堅牢にして行った。

ニュー・クリティシズムを歴史的に相対化することは、現在にも繋がる課題である。当時、一つの詩を理解するために、その詩の内容だけで読解を試みることが、ストイックで清廉であり、ブルジョア的驕奢を遠ざける身振りとして理解されることはあり得ないことではなかった⁶。しかし、文字情報が電子媒体としてグローバルに利用可能となった現在ではそうした読解の姿勢にはアナクロニズムの印象さえつきまとう。英文学作品としてアンソロジーなどで纏められるものが文学テキストと規定されているのを見ると、なぜそのように提示されたものが文学テキストであって、それ以外のものは文学としての学問的枠付けがされないのかという疑問を抱くことはむしろ不思議ではない。文学というカテゴリーが存在し、それは他よりもはるかに精神的に優れた表現を示すものなのである、といった理由にどれだけ説得性があるのかも現在では曖昧である。紙媒体のみならず電子媒体の情報化の速度が極めて早くなった現在において、およそ百年前から始まった文学研究手法とその理念が深く沈降する形で継続している状況に対して、積極的な評価をどのように下すのかといえば、明確な答えを得るのはほとんど難しいだろう。次には、現在の英文学研究の有り方を再考する端緒とするために、かつてこの批評に対してどのような批判が生まれていたか、またそ

の批判を視野に入れた場合、コールリッジの詩理論の形成とニュー・クリティシズムとをどのように関連付けられるのかについて考察したい。これらの考察から、批評理論の歴史性についての検討も可能となるだろう。

2. ニュー・クリティシズム批判

ニュー・クリティシズムの潮流の優勢は、1940年代、ブルックスらの著作によって決定的となった。しかしその頃までに、ニュー・クリティシズムに対する批判は様々に提出されており、その中には現代でも考察に値するものがある。その一つが、当時ハーバード大学教授であった文芸批評家のダグラス・ブッシュ(Douglas Bush, 1896-1983)の論考である。1949年に発表されたこの論考の中で、彼は文学の研究に携わる者を、「学者」(scholars)と批評家(critics)に分けて論じている。「学者」とは伝統的な人文学研究の手法を身につけた人々の謂いであり、基本的に歴史的事項を重視し、作品の書かれた時代と作者の伝記的事項を考慮しながら研究する人々である。「批評家」というのは、ニュー・クリティシズムの批評家たちを中心とした、新しく作られた教授法や研究方法を推進する人々である。ブッシュは、「批評家」のものを読んでみると、彼らは喜んで教えようとするが、それ以上になにも学ぶものがないような様子である、と述べて、次のように続ける。

There emerges a picture of a little world of several dozen people who embody all the literary intelligence of the country, who form a compact and exclusive communion of saints. Like Augustine Birrell's House of Lords, they represent nobody but themselves and enjoy the full confidence of their constituents. Mr. A quotes Mr. B, Mr. B quotes Mr. A., Mr. A and Mr. B quote Mr. C and are quoted by him, and so on. Within this small band of the elect there is a beautiful harmony of mind, since they all speak the same language and are united by that special illumination from which the horde of untouchables are cut off. (Bush, 14)

何十人かの人々の小さな世界の姿が浮かび上がるのだ、その人々はこの国のあらゆる文学的知性を体現しており、こじんまりして排他的な聖者の共同体を作っている。オーガスティン・ビレル(Augustine Birrell)の上院のように⁸、彼らは彼ら自身以

外何も代表してはおらず、彼らの政体に満身の自信をもっているのだ。A氏はB氏を引用し、B氏はA氏を引用し、A氏とB氏はC氏を引用し、そして彼自身によって引用され・・・等々。この選ばれた小さな軍団の中には美しい心の調和があって、というのも彼らはすべて同じ言語を話し、そして汚らわしい人々の群れが切り離されたあの特別な光明によってつながれているのだ。

一般的に学術的営為というものは、限られた数の小集団では成り立たない。一つの学問が次のステップへと発展するためには、学問的交流や発見によってこれまでの理解を覆す何かが必要である。そして新しく一つのことが明らかになると、それに関連した領域を研究する必要が新たに生まれ、考察の範囲が拡大、修正され、学領域が改編される、といった発展的展開を遂げるものである。ブッシュの示唆するのは、ニュー・クリティシズムにはこのような発展的な学びの契機がそぎ落とされているという点である。「排他的な聖者の共同体」において、自分(達)の持っている知識の枠組み以上に学ぼうとしない態度は、すでに確立されている価値体系に絶対的な優位を見ている態度であるが、ここではそうした態度がニュー・クリティシズムの批評家たちに見られることを指摘しているわけである。他者の持つ知識との交渉を行わない態度は、一つの政治的立場を譲らない態度でもある。それは独自の「言語」をもつ排他的なものであり、結果彼らはまた外部から自らを切り離している、ということになる。

興味深いのは、内側には「美しい調和」があり、外部とは切り離されている、という集団の存在は、ニュー・クリティシズム批評における詩の存在と隠喩的につながっているという点である。一つの優れた詩は「有機的統一体」(organic unity)であり、その内部には調和があり、その詩の言葉はそれ自体で意味を生成し外部的な文脈に依存しないと考えるのは、ニュー・クリティシズムの批評である。ブッシュによれば、この批評家たちの社会集団は、彼らが生み出した批評における詩のようなものなのである。ブッシュは彼らを「聖者の共同体」と呼んでいるが、この集団に悪意や利害的打算を読みとることは難しく、むしろ良いものに向かって熱心に事を運んでいるという印象があるからであろう。人倫を陶冶する優れた詩の力、といった教養主義的な信念を、そこに読みとっていると見ることもできる。

ニュー・クリティシズムの洗礼を受けて文学研究を始めた若い世代にとって、当時ブッシュの言説は

旧体制側からの嫌味のようにも受け取られたかも知れない。しかしブッシュがそれとなく暗示する、ニュー・クリティシズムに特徴的と考えられる自己言及的な、純粹でかつ非社会的な要素は、この批評潮流が英文学の研究に重要な刻印を残しているということからも問題にされてよいだろう。

ニュー・クリティシズムとその信奉者たちを外部から眺めるとどのように映るか—ブッシュの言説はその一つの例を示しているものであるが、もうひとつの例としてテリー・イーグルトン(Terry Eagleton, 1943-)の批判がある。イーグルトンはリチャーズの『実践批評』(*Practical Criticism*, 1929)に言及し、タイトルも作者名も隠された詩作品への学生たちのコメントを紹介している箇所について、彼らの分析にはリチャーズに代表される白人のアップパー・ミドルクラスの価値観が無意識のうちに流れ込んでいると指摘する。しかし、とイーグルトンは続ける。

If anybody is to be blamed it is I. A. Richards himself, who as a young, white, upper-middle-class male Cambridge don was unable to objectify a context of interests which he himself largely shared, and was thus unable to recognize fully that local, 'subjective' differences of evaluation work within a particular, socially structured way of perceiving the world. (Eagleton, 13)

もし誰かが非難されるとすれば、それはリチャーズその人なのだ。彼は若く、白人で、アップパー・ミドルクラスの男性のケンブリッジの指導教師で、彼自身が広く共有している利害関心が存する状況を客観化することができず、であるから特定の社会的に作り上げられた世界を把握するやりかたにおいて、価値判断に地域的で主観的な違いがあるということを十分に理解することができなかったのである。

イーグルトンの視点はマルクス主義批評によるものであるが、どのような立場の人からの意見も、その立場を社会的に立体化して考察した場合に、違う立場から異論が起こらないと限らない点において、重要な点を指摘しているといえるだろう。そして、ニュー・クリティシズムそのものが、特定の人種や社会階層の価値観とつながっていると考えるとき、これはこの批評の持つ政治性を、実際の社会にある多様な価値観から逆照射していることにもなる。ニュー・クリティシズムの批評理論に賛同し英文学研究を行う人々は、それが意識的には

特定できないとしても、なんらかの政治的立場を選びとっている、と考えることも不可能でないわけである。

これらは20世紀におけるニュー・クリティシズムの批判である。それでは、この批評理論が暗示する純粹かつ非社会的な性質や、政治性の隠匿といった特徴をどのように考えればよいのだろうか。次には、ニュー・クリティシズムの源流といわれるコールリッジの批評理論から考えてみたい。

3. コールリッジの批評原理とその時代

これまで見てきたように、文学が客観的な分析の対象物となり、文芸批評がアカデミズムの中に位置を占めるのは、20世紀になってからの現象である。コールリッジが活動した19世紀初頭には、一般に俗語である英語の文学は教育制度の中の学問対象とは考えられていなかった。当時人文学で学問対象となったのはギリシャ・ローマの古典であり、修辞学であって、哲学(philosophy)は、現代で言う人文科学と自然科学との間にまたがる思考の領域であり、科学は諸科学にまだまだ十分に分化しておらず、博物学(natural history)において広く植物、動物、鉱物などについての観察と考察が行われていた⁹。現代でいえば生物学や熱力学の領域も含みうる生命論は、観察に主眼を置けば自然科学的考察となり、理論を先行させれば哲学ともなるものであった。コールリッジが有機的統一体(organic unity)という概念を用いて批評に生かしたのはこのような時代の中であった。コールリッジは生命について、物質論(materialism)の立場をとらず生氣論(vitalism)の立場をとったが、生命体はその生命体を構成する物質によって加算的に形成された機械的なものではなく、物質を越えた生氣(spirit)によって生命が与えられていると考えていた¹⁰。コールリッジの場合、詩が有機的統一体であるというのは、詩作品の言葉の構造が有機体のアナロジーで理解し得るということ以上に、このような生命論のもとに理解されるべきなのである。詩の材料である言葉は、人間の社会のなかで共有されたものであり、個人の内的精神性に外在するものである¹¹。そのような言葉によって出来上がった詩に生氣を吹き込むのが詩人の想像力なのである。

さてこのようなコールリッジの批評理論は、どのような社会背景とともに生み出されたのか。コールリッジが最もラディカルであったのは、アメリカ移住計画のパンティソクラシー(Pantisocracy)に熱中し、ブリストルで過ごした1794-95年ごろと考えられている。その頃の彼の詩の理念は、詩が読者との共感を生み出し社会を変革

する声となるというものであった¹²。この詩の声によって共鳴を求める姿勢は、1800年に発表された『モーニング・ポスト』(*The Morning Post*)におけるコールリッジの宰相ピットへの攻撃にもその影を読みとることができる¹³。しかし、1806年のナポレオンの大陸封鎖令によりヨーロッパとイギリスとの通商が極度に制限された頃になると、コールリッジの文芸批評はより内向化し、様相が変わってくる。文学講演を始めたのは1808年であるが、この頃にはすでに詩の声が社会を変革する声になる、といった主張はしなくなっていた。そして、社会との関係を論じる代わりに、詩が生命を持つものであることを、ドイツ観念論哲学に強く影響を受けながらも、書き綴っていくことになる。文芸理論を作り上げていく間、同時にコールリッジはジャーナリストとしての活動を続けており、ダニエル・スチュアート(Daniel Stuart, 1766-1846)が社主であった『モーニング・ポスト』および『クーリア』(*Courier*)に1814年まで継続的に寄稿していた。コールリッジの筆が、これらの新聞に大いに貢献したことは、すでによく知られていることである¹⁴。彼の言論活動が決して文学の枠にとどまらないものであった事は、彼の文芸批評を考える際にも念頭に置くべきことであろう。

『文学的自叙伝』が制作された時の状況については、実はあまり詳細には知られていない。1815年、コールリッジは友人のジョン・モーガン(John Morgan, d. c 1819)を筆記者として、『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*)の口述筆記を始めた¹⁵。モーガンについての資料が少ないこともあり、コールリッジとモーガンの関係が掘り下げられることは少ないが、『文学的自叙伝』がコールリッジとモーガン一家(モーガン夫妻とモーガンの妹)との交流を背景として生み出された著作であることは重要視してよいだろう。1808年ごろから、コールリッジはブリストル時代の知人であったモーガン一家と交流するようになり、1814年ごろには共同生活を始めた。その間一家の人々はコールリッジの身を案じ阿片摂取を減らす助けをし、また破産したモーガンに代わってコールリッジが借金取りに対応するなど、様々に関わりながら生活をした¹⁶。1814年から1816年の間の1年と少しの間、ウィルトシャー州のカーン(Calne)という町にコールリッジとモーガン一家は滞在し、コールリッジはここで近隣の友人たちと交遊しながら、執筆活動に入った。カーンは古い教会堂と川のある市場町(market town)で、コールリッジの故郷、オタリー・セント・メアリー(Ottery St. Mary)を思わせる場所であった。カーンで過ごした1815年の春から秋の初めまでは、コールリ

ッジにとって久しぶりに落ち着いた数カ月だったようである。この年の夏には、コールリッジの長男ハートリーも合流している¹⁷。モーガンは伝記的にはほとんど知られていない人物であるが、200年ほど後、英語圏における最も重要な批評書と称賛されることになる著述の内容を、誰よりも早く知って書き写していたことになる。

『文学的自叙伝』は、一旦書きあげられた後で、第五章から第十三章のいわゆる哲学的数章が付け加えられたため、全体的な構成がいびつなものになっている。ただし、この哲学的数章を外した最初に完成した部分にはある程度の連続性があり、コールリッジの自伝的要素を多く含みながら、人生を時間軸で物語化して語ることはせず、これまで生きてきた中にもどのような文学への関わりがあり、またその関わりの中で自分がどう生き、またどのような意見を持つか、という視点を中心として書かれている。この点はこの書物の副題に「私の文学的人生と意見の自伝的素描」(“Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions”)とある通りである。

詩論が書かれているという意味で重要な第十四章は次のように始まる。文学理論の概説書にも、重要な箇所として引用されるところである¹⁸。

During the first year that Mr. Wordsworth and I were neighbours, our conversations turned frequently on the two cardinal points of poetry, the power of exciting the sympathy of the reader by a faithful adherence to the truth of nature, and the power of giving the interest of novelty by the modifying colours of imagination. (*BL*, II, 5.)

ワーズワズ氏と私が近所に住んでいた最初の一年の間に、私たちの会話はしばしば詩に関する二つの主要な点について交わされるようになった。自然の真実に忠実に従うことによって読者の共感を掻き立てる力と、想像力が色調を変化させることによって、新奇さへの興味を生み出す力である。

詩には読者の共感を引き出す力があると同時に、はっとするような驚きに似た感情を読者にあたえる効果がある、とコールリッジはワーズワズとしばしば語り合ったと述べる。しかし詩についての友人との会話は、二人が親しく過ごした日々のことへと展開せず、次に記述されるのは詩についての心理的な分析や効果である。そしてこのようなコールリッジの考察は、詩とは何かという問いに行きつく。コールリッジはその問いの必要性を語り、

プラトン(Plato, c.427-c.347 B.C.) やジェレミー・テイラー(Jeremy Taylor, 1613-67)やトマス・バーネット(Thomas Burnet, 1635-1715)が、韻律がなくとも詩は存在するというテーゼを示したことを述べる。ここで彼の議論は哲学的考察に向かっている。続いて、「詩とは何か、という問いはほとんど詩人とは何かという問いと同じである」(“What is poetry? Is so nearly the same question with, what is a poet?” *BL*, II, 15)とコールリッジは述べるのだが、このように彼は詩作品についての問いを、詩人の精神とはなにかという問いへと移行させていくのである。

想像力の働きを述べた続く個所において、詩は社会的文脈や歴史的な文脈を飛び越え、絶対的現在とでも言うべき位置に置かれているかのように説明されている。コールリッジは、詩人についてこう述べる。

The poet, described in *ideal* perfection, brings the whole soul of man into activity, with the subordination of its faculties to each other, according to their relative worth, and dignity. (*BL*, II, 16)

詩人は、その完璧な状態を叙述するのであれば、人間の全ての魂を活動させるのだ。その相対的な価値や重要さにしたがって、魂の能力それぞれをお互いに従属させながら。

詩人が知性と感情とをすべて統一させることができる優れた能力の持ち主であることは明快に伝わってくるが、それでは詩人は何を謳い、誰に向かってメッセージを伝えようとするのか。『文学的自叙伝』には、『エディンバラ評論』(*The Edinburgh Review*)の主筆であったフランシス・ジェフェリー(Francis Jeffery)への批判が書かれている。当時の批評誌が悪口雑言の応酬のようになる場合もしばしばあったことを考えると、コールリッジは世俗的な栄誉などはさておき、優れた詩を書く精神の卓越性をとにかく強調したかったということがまぎれなく考えられる¹⁹。とはいえ、当時の読者のどれだけが、このような詩人と想像力との関係を理解できたか、というのは実際のところよく分からない。そして、読者の存在を意識し、読者の理解力を推測するというようなそぶりの全く無いまま、コールリッジは詩人について次のような抽象的な定義を提出する。この部分も、ニュー・クリティシズムにおける詩人とその作品の卓越性を説明する一つの理論的バックボーンといえる箇所である。

He [The poet] diffuses a tone, and spirit of unity, that blends and (as it were) fuses, each into each, by that synthetic and magical power, to which we have exclusively appropriated the name of imagination. This power, first put in action by the will and understanding, and retained under their irremissive, though gentle and unnoticed, controul ... reveals itself in the balance or reconciliation of opposite or discordant qualities... (*BL*, II, 16)

詩人はあの統合する魔法の力で、混ぜ合わせ、あたかも融合するような統一の精神と色合いとを満ちわたらせる。この力に、私たちはもっぱら想像力という名前を適応させてきた。この力は、最初に意思と判断力によって働き始め、寛大で気付かれないとはいえ緩められることのないそれらの力の制御の下に保持され、対立する、もしくは相容れない要素を調和させ和解させる。

想像力は、意思と理解力の元で働く、というのは、心が意欲をもち物事を分かっている状態でないと何かを想像したりすることも心に定着させることもできないという、いわば当たり前のことを言っているようでもあるが、この言説の背景にあるのは、ドイツ観念論哲学などにみられる、人間の能力のカテゴリー化と、それぞれの能力間の関係を明確にするという哲学的作業である。意思(will)、理性(reason)、判断力(understanding)、想像力(imagination)などについて、それぞれ人間のもつ異なった能力としてコールリッジは定義づけているのであり、想像力がそれらさまざまな力を仲介するように働く、と考えているのである。このような思考は、19世紀初頭のドイツ観念論のイギリスにおける受容という一つの視点から考えることができるが、同時に文芸批評への応用ということを考えれば、突出した事例であったとも考えられる。ただし付言すれば、想像力は、傾向とすれば力学的な概念であり、心理的、情緒的力そのものを表すものというより、関係性を問題とする概念である。その概念は様々な社会現象に応用可能であり、決して文芸批評にとどまるものではない。

コールリッジが『文学的自叙伝』で記述した文芸批評理論が、当時の文壇で話題になったという記録は見当たらない²⁰。コールリッジの説く詩人の想像力は極度に抽象的な記述を含むものであり、同時代的理解をむしろ拒んでいるような傾向もある。リチャーズをはじめとしたニュー・クリティシズムの批評家たちにとって、こうしたコールリッジの批評理論の一見した非歴史的な特徴は、

手法上の方向性とも相容れるものとして、彼らの理論形成にとって都合のよいものだったと言えるかもしれない。ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) やレズリー・スティーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) の描きだした、時代とともに歩んだ思想家コールリッジは、ニュー・クリティシズムの批評家たち (たとえばリチャーズ) の議論の中にはいなかった²¹。モーガンとの共同作業であった『文学的自叙伝』の製作も、当時のコールリッジの孤独も、そして長引く戦争で疲弊しインフレで苦しむ国内経済についても²²、当然ながらニュー・クリティシズムの議論の射程には入らなかった。コールリッジの詩の定義も想像力の定義にも、直接的には何ら時代的な要素を読みとることができるわけではないが、そのことが、コールリッジの批評活動が社会的文脈からは離れ、また時代の影響を受けていないということでは決してない。個人の力では抗う事のできない戦時下の状況の中で理論化や作品世界の分析の精度が高まることは、無用の長物となりかねない文芸作品の伝統とその意義を、言論によって防御する身振りとしても理解できるものだからである。

『文学的自叙伝』は、1817年に出版されたが、その翌年出版社が倒産したこともあり、コールリッジが生存中は一度も再版されることがなかった。この本の出版のすぐ後、モーガンは病に倒れ、回復しないうちにすぐに亡くなった。『文学的自叙伝』が再版されたのは1847年であるが、編者で娘であるセアラ・コールリッジ (Sara Coleridge, 1802-1852) は、シェリングなどドイツ観念論哲学の思想家の著作からの剽窃の問題について、長々と前文で記述しなければならなかった。この再版本は歴史的に見て重要なエディションであるが、20世紀になる頃には、絶版となっていた²³。1907年、20世紀の版として非常に広く読まれた、ジョン・シュークロス (John Shawcross, 1871-1966) 編集の『文学的自叙伝』が出版されるに至って、この本は英文学の歴史の中で重要な本として認知されるようになる。シュークロスの序文は、剽窃の問題を不問に付して、それまでに収集されたコールリッジの書簡や同時代の人々の証言を用いながら、コールリッジの詩理論における想像力の重要性を強調したものであった²⁴。シュークロスの版には、コールリッジの文芸理論に関する論考がいくつか付けられていた²⁵。ニュー・クリティシズムの潮流の中で、文芸理論家としてのコールリッジの原典を読みたい人々にとっては、十分に整えられた版だったといえる。別な見方をすれば、シュークロスの版が受け入れられたという事実は、コールリッジが批評家としてすぐれて

いたことを後世になって人々が理解した、というよりも、20世紀前半に英文学と取り組んだ人々の必要性が、コールリッジに批評家としてのステイタスを与えたということを示しているともいえるだろう。

4. コールリッジのシェイクスピア批評

コールリッジの詩理論の中心となるのが想像力の働きであれば、コールリッジの詩論の根本は心の働きを主眼としたもの、すなわち精神論であるということになるだろう。それでは言語による構築物である詩作品はどうなるのか。詩が言語で表現されて伝わるものである限り、作品を起点として読者や観客の心を問題にする必要が出てくるだろう。コールリッジのシェイクスピア批評には、観客の想像力の働きに言及しているものもあることから、そういった言及が見られる『テンペスト』(*The Tempest*) の批評から考えてみたい。

注意しておきたいのは、コールリッジのシェイクスピアについての講演録が彼の存命中に出版されることはなく、また出版の意図もなかったと言う事である。したがって、コールリッジのシェイクスピア批評の内容は、彼の残した講演の際に利用した断片的なノートやテキストやマージナリア、講演内容を紹介する新聞記事、速記録、講演を聞いた人の日記などによって知られることになった。最初に文学講演として纏められたのは、コールリッジの娘セアラの夫であり、甥でもあったヘンリー・ネルソン・コールリッジ (Henry Nelson Coleridge, 1798-1843) によってである。*Literary Remains* として1836年に出版されたコールリッジの遺稿集には、シェイクスピアやベン・ジョンソンなどエリザベス朝の劇作家についてのコールリッジの文章が収録されていた。この遺稿集の編集上の問題点は、ばらばらな断片の集積といってよいコールリッジのシェイクスピア講演のなかで関連する草稿を、H.N.コールリッジがテーマの連続性と統一性を持たせるために加筆や編集を行い出版したことである。しかも、講演が行われた順序ではなく、『テンペスト』であればその話題のものを、その講演に用いられたと考えられるものを中心として構成するという形をとった。H.N.コールリッジはコールリッジの談話集 (*Table Talk*, 初版1835年) の筆者でもあり、編集者でもあったことから、コールリッジのシェイクスピアについての発言については多くを直接聞いていたと考えられ、そうしたことも編集を容易にさせたかもしれない。しかし、この遺稿集で行われた編集の形が、その後も長くそのまま保持されることになったことは、コールリッジのシェイクスピア批評を考える際のテキスト上の問題

を残すことになったのである。1836年に最初に纏められた版以降、新聞に掲載されたコールリッジのシェイクスピア講演の内容や、速記録が次々に現れ、コールリッジのシェイクスピア批評の講演に関する情報は増大した。1930年にレイザー(Thomas Middleton Raysor, 1895-1974)の編集により出版された『シェイクスピア批評』(*Coleridge's Shakespearean Criticism*)は、それまでに集積された講演録や関係資料を読みやすくまとめた点で決定版といってよいものである。しかし、読者にとって読みやすい文章の多くが、H.N.コールリッジの修正、加筆を受けたものであったり、速記録に基づいたものであったりしたということは、記憶されてよいだろう。

このレイザーの版は、英米の高等教育に文学研究が根付き、ニュー・クリティシズムの潮流が優勢になった時期に積極的に受容されたものである。但し、H.N.コールリッジの編集と同様、コールリッジの文学講演が行われた時間順序ではなく、主題ごとに読むように纏められており、コールリッジのノートやマーヅナリアからの収録についても、一つ一つが厳密に識別されているわけではなかった。総合的に見ると、コールリッジのシェイクスピア批評は、コールリッジの文学講演の内容を伝えるのに十分な量をもったものとして残っているが、出版されたテキストはすべて本人の死後の編集であり、編集のプロセスがすでに分からなくなっている箇所もあり、クロス・リーディングなどの手法で厳密に読むことができない性質の文章を多く含むものである。

さて、このようにテキストを厳密に考査することができるようになったのは、プリンストン版の『コールリッジ全集』の文学講演の巻(*Lectures on Literature 1808-1818*)が1987年に出版されて以降のことである。テキスト云々をさておいても、コールリッジのシェイクスピア批評は20世紀の文芸批評に対して多大な影響を与えた。彼の批評は登場人物の心の働きの詳細な分析に特徴があるが、彼はそういった心理分析のみならず、登場人物それぞれの行為が詩劇のなかで有機的に関連し、筋が展開していくその様をさまざまに描きだした。一般的に、有機的統一体の概念は、詩劇の展開を説明する理論的バックボーンとなっていると考えられる。従って、コールリッジの詩劇批評には、古典主義における詩劇の規範として長く受け入れられたアリストテレスの三一一致の法則はもうなかった。それまで良く知られてはいたが決定的な理論的評価がなかったシェイクスピアが、時代を越えた価値をもつ普遍的な—すなわち非歴史的な—存在となったのである。

それでは次に、コールリッジの『テンペスト』の批評を見ていきたい。これは1987年の『コールリッジ全集』に採録された1818年の連続公演の第一日目のものである。Aとした方が、『テンペスト』が収録されたシェイクスピアの詩劇の本の白紙のページにコールリッジが書き付けたもので、Bとした方がその続きとして編集された、H.N.コールリッジによるこの講演に関連するコールリッジのノート類を中心として一つのトピックをもつものとしてつなぎ合わせた部分の冒頭である。この二つの文章は、レイザーの版では一つのものとして纏められている。この講演の冒頭で、コールリッジはなぜ『テンペスト』を選んだのかを最初に説明し、次に続けたようである²⁶。

A: THE TEMPEST, I repeat, has been selected as a specimen of the Romantic Drama—i.e. of a Drama, the interests of which are independent of all historical facts and associations, and arise from their fitness to that faculty of our ~~hu~~ nature, the Imagination I mean, which owes ~~ns~~ no ~~hom~~age allegiance to Time and Place/ ~~and in wh~~ a species of Drama therefore, in which errors in Chronology and Geography, no mortal sins in any species, are venial, or count for nothing. (LL, II, 268 削除線はコールリッジのもの)

繰り返すが、『テンペスト』は、ロマンス劇の典型として選ばれたのだ。ドラマの興味は、あらゆる歴史的な事実や関連したものから独立しており、時間や空間に何らとらわれることのない想像力という私たちの天性にあるあの能力にぴったりとしたものとして現れる。であるからこうした種類の劇は、年代の順番や場所においての間違いがあっても、どのような作品においても致命的な罪というわけではなく、許し得ること、もしくは何も問題にならないことなのである。

B: It addresses itself entirely to the imaginative faculty; and although the illusion may be assisted by the effect on the senses of the complicated scenery and decorations of modern times, yet this sort of assistance is dangerous. For the principal and only genuine excitement ought to come from within,—from the moved and sympathetic imagination; whereas, where so much is addressed to the mere external senses of seeing and hearing, the spiritual vision is apt to lan-

guish, and the attraction from without will withdraw the mind from the proper and only legitimate interest which is intended to spring from within. (LL, II, 268-69)

これはそれ自体全く想像的な能力に向けられたものである。幻想が現代の複雑な舞台面や装飾が与える感覚的な効果に支えられたとしても、しかしこのような種類の舞台上の補助は危険なものなのである。なぜなら、主要な、そして本物の興奮のみが内側からやってくるべきものだからだ。感動し共感に満ちた想像力から。一方で、単に見ることや聞くことの外からの感覚に多くが向けられるところでは、精神的なヴィジョンは衰えがちになり、外部から引きつけるものが、内部からわき起ころうとする正しく唯一の正当な関心を、心の中から退けてしまうだろう。

Aの部分でコールリッジは、『テンペスト』のようなロマンス劇において、時間と場所の合理的な説明がたとえできなくとも、こういう種類の劇は、そもそも観客の想像力に合ったように作られているのであるから問題にならないと述べている。この引用の文章は時折センテンスが未完成であり、修正しながら書いているもので、メモであることが分かる。趣旨としては、ロマンス劇に三一致の法則などはあてはめる方がおかしい、見る者の想像力はこういった種類の劇によって自然に広がって行くものだ、といったことだろう。想像力が、一見ばらばらに見えるものでもつなげて調和させるという原理を、観客の心の働きから説いているわけである。しかし、想像力が時間も場所も飛び越えてしまうということであれば、そこに何の秩序も現れないこともありうる。そうであれば、想像力は無秩序の中から秩序を生み出し、新しいものを創り上げる力とは理解されずに、空想に心を遊ばせることと同じと考えられる場合もあるであろう。コールリッジが想像力を、様々な機会に理論化して語っていたことを考えると、この部分の説明は不完全にも思える。そこで、おそらくH.N.コールリッジが考えたであろうことは、想像力の働きの補足的な説明になり、また『テンペスト』の講演の内容ともつながった材料、すなわちBの部分、続きとして利用することである。

Bの部分の冒頭にある“*It*”は、何を指すのかは正確には分からない。Aの部分からテキストが続いていると考えれば、『テンペスト』のことになるが、実際のテキストは分断しているのであるから、その確証はない。このBに続く次のパラグラフ以降は、『テンペスト』の内容が言及されているため、この講演に関係したものと考えられ

るが、Bの部分に関してはそれが定かではない。Bの部分、この部分で1パラグラフを構成している独立したものとして読めば、外的な感覚に頼り興奮や喜びを得ようとすることに対する警告を発したものであり、「感動し共感に満ちた想像力」とは、感覚的刺激と内的な理性と情念の働きを、調和を持ち道徳的な方向に導くものとして捉えているものである。そのように読むと、この部分は必ずしも『テンペスト』に対する批評でなくとも良いわけであり、観客(もしくは読者)の心の働きに主眼を置いた一般的な芸術批評の一つとなる。

コールリッジのシェイクスピア批評を考える際、ナポレオン戦争の後期から終結期における講演録であるということが重要であろうし、イギリスが産業革命期をすぎてヨーロッパでの覇権をつかもうとする時代に、国民的劇作家を論じるというところから生まれる緊張感がいかなるところにあるか、と分析することも出来るものだといえるだろう。「対立する、もしくは相容れない要素を調和させ和解させる」力が、当時のヨーロッパの国々に働くのであれば平和への道、となるかもしれない。とはいえコールリッジは平和について語ったわけではなかった。彼は人々がいつでも読むことができる、詩の力について述べることにとどまった。ニュー・クリティシズムの批評家たちが、コールリッジの有機的統一体の概念を援用し、文学作品の自律性を主張するとき、彼らはコールリッジの批評活動の結果だけを汲み取り、なぜそうした批評の形に至ったか、という点については考慮しなかった。しかし、批評にはその時代との緊張感を読み取ることが出来ることも確かなのである。コールリッジのシェイクスピア批評に関係する原稿やノート類が、断片の集積としてしか残されなかったことは、そうした緊張感との関係で考察することができるはずである。

5. 今後の課題

ニュー・クリティシズムが隆盛となった1940年代、コールリッジの著述の多くは活字になっておらず、それまでに出版されたものでも、シェイクスピア批評のテキストに示されるように、テキスト上の問題を含むものがあつた。コールリッジの提示した想像力や有機的統一体の概念は、ニュー・クリティシズムに援用された際には、普遍的な概念であると考えられたかもしれない。しかしながら、同時代的な視点からのコールリッジの思想の考察や、伝記的に掘り起こされてこなかった事項や、またテキスト編集上の問題点などを考えれば、コールリッジが提示したそれらの概念についても、新しく考察される余地は十分にあるだろう。ニュー・クリティシズムの手法

が、テキストの無謬性、すなわち一字一句が他のものとは決して置き変わらない性質—を前提としなければ成り立たないことを考えると、歴史的な文脈やテキストの可変性によって容易にその手法の限界が露呈するということが考えなければならない。

先にあげたブッシュの指摘にあるように、「聖者の共同体」というような、共通の価値観で結ばれた紐帯が、英文学研究という教育現場と密接に関連した制度的な営みの中に置かれた場合、どのように自発的な発展の契機をつかむかという点が問題である。その共同体は内部で価値観を共有しているが、外部的なものとの交流や刺激、またそれによる自らの変革というメカニズムを所与のものとしては持たないからである。これを克服するためには、ここ数十年行われてきたように、ニュー・クリティシズムを過去に追いやり、新しい批評や研究手法を次々に提出するということになるのかと考えられるが、現実的には、どのような理論によってテキストに向き合っても、「読む」ことの様々な形や「読みうる」ものをどうとらえるか、という基本の地点から考えざるをえないのも確かだろう。また、テキストがどう読みうるのかという点については、時代とともに読み直されるべきものであることも確かである。そしてその際、テキストにアプローチする手法やテキストを見る視点が、時代とともに変化するのとは当然である。コールリッジの著述を網羅する『コールリッジ全集』の膨大な出版計画をボーリゲン財団(Bollingen Foundation)とプリンストン大学出版局が1960年に発表した際、第二次世界大戦後に広く受け入れられたフォルマリズム批評の重要な理論家の著作を後世に残す趣意があったと指摘されている²⁷。しかし現在、『ノートブック』や『全集』など、コールリッジの全ての著述の刊行が終了し、コールリッジをフォルマリズム批評の理論家としてのみ重要と考えることはほとんど不可能になっている。ニュー・クリティシズムとコールリッジとを結びつけることでさえ、過去のコールリッジ受容をたどらなければ中々見えてこない場合もあるだろう。これまで見てきたことから、ニュー・クリティシズムが極めて歴史的な現象であるということは確かなことである。しかし、それが英文学研究の制度化とともに定着したことや、その中で現在でも批評の運動としての輪郭をなくしながらも手法として残っているということを考えると、この考察にはさらに多角的なアプローチが必要なことは確かである。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 挑戦的萌芽 (24652061) によるものである。

なお、本稿における翻訳はすべて著者による。

¹ Snyder によると、アメリカの1910年から1930年までの高等教育機関への進学者は、進学者年齢の人口の2%から7%へと急激に増加し、1949年には15%に達している(65)。

² この手法の他に、“connotation” “denotation” “tension”など、ニュー・クリティシズムで導入された批評用語や概念は多種存在するが、ここでは詳細に論じない。Bressler, 60-63参照のこと。

³ Graff, *Professing Literature*, Chapter one “Introduction: The Humanist Myth,” 1-15 に、アメリカの高等教育における人文学教育の経緯についての記述がある。ただし、これはイギリスにおける事情とは異なっている側面がある。イギリスにおける英文学教育の事情については、Palmer, 特に104-117参照。

⁴ Jancovichにこの点に関する詳細な情報がある。但し、主眼はランサム、テイト、ウォーレンの南部出身の詩人、批評家たちに置かれており、ニュー・クリティシズムの潮流を俯瞰したものではない。その他、Willingham, John R. “The New Criticism: Then and Now”に総括的な歴史的概説がある。

⁵ コールリッジのこの用語の使用は、『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*)にある。“IN THE application of these principles to purposes of practical criticism as employed in the appraisal of works more or less imperfect, I have endeavoured to discover what the qualities in a poem are...”(*BL*, II, 19) 『文学的自叙伝』の編者は、“practical criticism”という用語について、コールリッジが、「詳細に立ち入らないような批評はどんなものでもほとんど役に立たない」(“how little instructive any criticism can be which does not enter into minutiae.” *CN*, III, 3970) という信念があったことを指摘している。ただし、ノートブックの記述を詳細に読むと、コールリッジのこの文言は、『エディンバラ評論』などに見られる人格攻撃も辞さない酷評に対抗するための備忘録であったようである。

⁶ Jancovich, 13-17参照。

⁷ ブッシュの議論の背景には、長い人文学研究の伝統が、1940年代までの高等教育機関への進学者の増加によって変質してきていることある。「学者」と「批評家」は本来二つに分かれるものではなく、学究的な営みにはどちらも大切であるというのがブッシュの主張である(“It must surely be assumed that scholarly learning and

critical sensibility form an indissoluble partnership,”14)。「学者」と「批評家」を分けて論じるのは、ニュー・クリティシズムの批評家たちによる色分けであって、ブッシュはその分類方法を皮肉っぽく利用しているということになる。

⁸ 「オーガスティン・ビレルの上院」とは、1916年のアイルランドにおけるイースター蜂起の際にアイルランドを代表していたビレルとその他の上院議員たちのことを指している。彼らはロンドン、ウェストミンスター国会でのアイルランドを代表する議員であったが、ブッシュは、社会の現実から隔離された特権階級の比喩としてビレルの上院を用いているようである。

⁹ 日本語において「哲学」という語が、19世紀以降のドイツ観念論などをイメージとした語として定着するようになるのは、19世紀末末になった頃である。日本語で philosophy と同義の言葉はないため、ここでは暫定的に「哲学」(philosophy)としている。また、natural history は「博物学」「博物誌」「自然史」などと訳されるが、自然に存在する事物すべてを研究する学問であった。

¹⁰ 拙稿、「『文学的自叙伝』に見る生命論—ハートリー思想の影響において—」を参照のこと。

¹¹ コールリッジは言語の外在性をよく認識していた。“Language & all symbols give outness to Thoughts/& this the philosophical essence & purpose of Language” (CN, I, 1387)

¹² 1796年に出版した *Poems on Various Subjects* の序文に、この考えが良く示されている。“The communicativeness of our nature leads us to describe our own sorrows; in the endeavor to describe them intellectual activity is exerted; and by a benevolent law of our nature from intellectual activity a pleasure results which is gradually associated and mingles as a corrective with the painful subject of the description.... We are for ever attributing a personal unity to imaginary aggregates...” (*The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, II, 1136)

¹³ コールリッジは、ピットには現実的な社会の改良に何が必要なのかを知る能力がなく、国民が食料危機におびえていることに対して何ら想像力を働かせることができないとして、次のように述べている。“These are things, these are realities; and these Mr. Pitt has neither the imagination to body forth, or the sensibility to feel for.” (*The Morning Post*: 17 March 1800, “Pitt and Bonaparte. Pitt,” *Essays on His Times*, I, 224.)

¹⁴ コールリッジのジャーナリストとしての活動とその評価については、Burwick (ed.) *The Oxford Handbook Samuel Taylor Coleridge*, 165-84を参照のこと。

¹⁵ モーガンについては、Holmes, *Coleridge: Darker Reflection*, 373-375, 385-387.にある記述が、おそらく最も詳しいものである。CN, III, entry 4108nも参照。モーガンはブリストルの裕福な商人の家族に生まれ、若い日のコ

ールリッジの支援者の一人だった。コールリッジとモーガンについて、ノートブックの編者の Kathleen Coburn は、“Possibly the relation [between Coleridge and Morgan] was a more sympathetic and important one than our ignorance of John Morgan’s life has allowed us to surmise.”(4108n.)と述べている。

¹⁶ コールリッジの阿片摂取は、アルコールに溶かしたアヘンチンキを痛み止めとして使用したものである。連用性が高いために摂取量を減らすことが難しくなっていた。コールリッジの健康状態については、文学研究ではほとんど考察されることがないが、20代から体に痛みがあり断続的に続いていたこと、62歳まで生きていたこと、人格崩壊等の事実は無いこと、死後解剖では心臓肥大が観察された他、腫瘍等は見つからなかったことなどを総合的に考えて、関節リウマチであったと考えられる。死後解剖については、CL, VI, 991-1002参照。

¹⁷ Holmes, 386 参照。その他、Potter (ed.) *Minnow among Tritons*, 36およびCN, III, 4188n.にも言及がある。コールリッジはカーンで説教も書いているが、その原稿は失われたようである。CN, V, 5727, 5727n.

¹⁸ Matterson, 168参照のこと。但し、コールリッジのニュー・クリティシズムへの影響をどうとらえるかは、アメリカとイギリスでは異なっているようである。Bressler, 52-56.参照。

¹⁹ コールリッジは『文学的自叙伝』を出版する前後に、立て続けに著述を世に出したが、それらへの書評には非常に悪意に満ちたものが多くあった。J. R. de J. Jackson は、“the treatment of Coleridge’s writing during this period [1816-17] is one of the sorriest performances in the history of reviewing”と述べている(9)。

²⁰ 『文学的自叙伝』が出版された当時の書評は、悪評がそのほとんどを占めた。もっとも強烈であったのは、Christopher Northのもの(*Blackwood’s Edinburgh Magazine*, Oct. 1817)である。Jackson によれば、“To the charges of wilful obscurity, inconsistency, and political hypocrisy, are added attacks on Coleridge’s conceit, spitefulness and domestic irregularities.”という調子であった(12)。

²¹ *Mill on Bentham and Coleridge* に、19世紀を代表するコールリッジ論がある。ミルの論考は、イギリスにおける二つの“seminal minds”を論じたものとして有名である。ステイーヴンの娘であるヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)の *A Room of One’s Own* にもコールリッジへの言及がある。

²² 1800年ごろからナポレオン戦争が終わる1815年ごろまで、イギリスでは極度のインフレが進行していた。この時期のコールリッジの生活の不如意も、こうした事実が関係している。MacFarlane 参照。

²³ Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. Shawcross, 2 参照。

²⁴ Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. Shawcross,

xi-xcvii

²⁵ シュークロスの版に付けられているのは、次の論考である。“The Essays on the Principles of Genial Criticism,” *Felix Farley's Bristol Journal*, in August and September, 1814; “Fragment of An Essay on Taste,” and “Fragment of and Essay on Beauty,” in *Literary Remains*, vol.1, 1836; “On Poesy or Art,” *Literary Remains*, vol1, 1836. これらの論考はすべて文芸評論であるが、これが付け加わることで、『文学的自叙伝』が、文芸批評についての著述であるという印象が強くなったのも確かである。実際は、多くの哲学的考察と、社会批評を含むものである。

²⁶ この講演の速記録等は残っていないため、コールリッジがその日の冒頭に何を話したかは正確には分からない。

²⁷ Klancher,86参照。Klancher は次のようにも述べている “*The Collected Coleridge displays a decidedly uncollectable Coleridge whose “texts” are enmeshed with those of his radical, mass cultural, middle-class, political, religious, skeptical, and literary interlocutors.*” (86)

<Abbreviations>

BL: Coleridge, *Biographia Literaria*, Ed. James Engell and W. Jackson Bate.

CL: *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*

LL: Coleridge, *Lectures 1808-1819 on Literature*

CN: *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*

<参考文献>

Bressler, Charles E.(ed.) *Literary Criticism: An Introduction to Theory and Practice*. 5th. ed. Boston: Longman, 2011.

Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. New York: Harcourt Brace, 1947.

Brooks, Cleanth and Robert Penn Warren. *Understanding Poetry*. 3rd ed. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1960.

Burwick, Frederick. *The Oxford Handbook of Samuel Taylor Coleridge*. Oxford: Oxford University Press, 2009.

Bush, Douglas. "The New Criticism: Some Old-Fashioned Queries." *PMLA*. 64(1949): 13-21.

Coleridge, Samuel Taylor. *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earnest Hartley Coleridge. 2vols. Oxford: Clarendon Press, 1912.

---. *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and W. Jackson Bate. *Collected Works*, vol. 7. 2 vols. Princeton: Princeton University Press, 1983.

---. *Biographia Literaria*. Ed. Sara Coleridge. 2 vols. 1847; New York: William Gowans, 1852.

---. *Biographia Literaria: with His Aesthetical Essays*. Ed. J. Shawcross. 2vols. Oxford: Clarendon Press, 1907.

---. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6 vols. Oxford: Clarendon Press, 1956-71.

---. *Essays on His Times*. vol3. 3vols. Ed. David V. Erdman. Princeton: Princeton University Press, 1978.

---. *Lectures 1808-1819 On Literature. Collected Works* vol.5 2vols. Ed. R.A. Foakes. Princeton: Princeton UP, 1987.

---. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. 5vols. Eds. Cathleen Coburn and Anthony John Harding. Princeton: Princeton University Press,

1957-2002.

Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 1st ed. London: Blackwell, 1983.

Eliot, T. S. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. London: Methune, 1920.

Graff, Gerald. *Professing Literature: An Institutional History*. Chicago: University of Chicago Press, 1987.

Holmes, Richard. *Coleridge: Darker Reflections*. London: Harper Collins, 1998.

Jackson, J. R. de J. *Coleridge: The Critical Heritage*. New York: Barnes & Noble, 1970.

Jancovich, Mark. *The Cultural Politics of the New Criticism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

Klancher, John. "English Romanticism and Cultural Production." in *The New Historicism*. Ed. H. Aram Veese. London: Routledge, 1989.

MacFarlane, Helen and Paul Mortimer-Lee. "Inflation over 300 Years." *Bank of England Quarterly Bulletin*. May 1994, 156-62.

Matterson, Stephen. "The New Criticism." in *Literary Theory and Criticism: An Oxford Guide*. Ed. Waugh, Patricia. Oxford: Oxford University Press, 2006. 166-175.

Mill, John Stuart. *Mill on Bentham and Coleridge*. Introd. F. R. Leavis. London: Chatto & Windus, 1959.

Palmer, D. J. *The Rise of English Studies*. London: Oxford University Press, 1965.

Potter, Stephen (ed.). *Minnow among Tritons: Mrs. S. T. Coleridge's Letters to Thomas Poole 1799-1834*. Bloomsbury: Nonesuch Press, 1934.

Ransom, John Crowe. *The New Criticism*. Norfolk, Conn: New Directions, 1941.

Richard, I. A. *Practical Criticism: A Study of Literary Judgment*. London: Kegan Paul, 1929.

---. *Principles of Literary Criticism*. London: Routledge & Kegan Paul, 1924.

Snyder, Thomas D. (ed.) *120 Years of American Education: A Statistical Portrait*. National Center for Education Statistics. 1993.
<http://nces.ed.gov/pubs93/93442.pdf> 20150931

Warren, Robert Penn. "A Poem of Pure Imagination (Reconsiderations VI)." *The Kenyon Review*, Vol. 8, No. 3 (1946): 391-427.

- Willingham, John R. "The New Criticism: Then and Now," in *Contemporary Literary Theory*. Atkins, G. Douglas and Laura Morrow (eds.) London: Macmillan, 1989. 24-41.
- Wimsatt, W. K. and Monroe C. Beardsley. "The Intentional Fallacy." in *The Verbal Icon: Studies in the Meaning of Poetry*. New York: Noonday, 1958. 3-18.
- . "The Affective Fallacy." in *The Verbal Icon: Studies in the Meaning of Poetry*. New York: Noonday, 1958. 21-39.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. eBooks@ Adelaide. University of Adelaide Library.
<https://ebooks.adelaide.edu.au/w/woolf/virginia/w91r/20160127>
- Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Eds. R. L Brett and A. R. Jones. London: Routledge, 1963.

石倉和佳 「『文学的自叙伝』に見る生命論—ハートリー思想の影響において—」『兵庫県立大学環境人間学部 研究報告』14 (2012) : 81-93.

ウルフ、ヴァージニア 『自分だけの部屋』 川本静子訳 みすず書房 1998年

コールリッジ、サミュエル・テイラー 『文学的自叙伝』東京コールリッジ研究会訳 法政大学出版局 2013年

ミル、ジョン・スチュアート 『ベンサムとコールリッジ』 松本啓訳 みすず書房 1990年

(平成 27 年 9 月 30 日受付)